

なまけものつめあわせ

Sample

『サクラサク』

千鳥が淵の桜は満開だった。

皇居へと続く道、靖国の参道、昔誰かが「タマネギ」と唄った武道館の屋根まで、見渡す限り、見事な桜色。

平日だというのに人出のすごい事。花見客と、彼らから精一杯お金をもらおうとする屋台が、所狭しとひしめきあう。

武道館ではどこぞの大学の入学式が行われている。まさにサクラサク、といったところか。

私はそんな光景を、川沿いのベンチに腰掛けて、ぼんやりと見送っていた。

私を振り返る人はいない。気づく人はいない。

気づく訳が無い。彼らに私は見えるはずが無い。

幸せそうな表情をした彼らは皆、知る由も無いだろう。つい一週間前まで、ここの桜がまだ五分咲きだった事を。

ましてやその日——北の方で火山が噴火し、次の日には総理大臣が倒れたあの日、この桜並木を見下ろせる病院で、一人の人間がこの世を去った事なんて。

人は生まれた時から死に向かつて生きてゐる、とは、誰かが言った言葉だと記憶している。人は必ず老いて死んでいくものだ、醜いと目を逸らすな、とは、いつかの授業で聞いた事。

だけど、全ての人間が必ずしも老いによつて死んでいくわけではない。何らかの理由によつて、老いのプロセスを通り越して死に至る者は、世界中に「まん」といる。

私もその部類に入つてしまつただけだ。

悪性腫瘍、いわゆる癌だ。

現代医学なら、手術や薬剤によつて末期でも回復する可能性もあるという。でもそれは、本当に一握りの、運の良い人達の例で。

そして幸運は、私のような一般人の前に降りてくる事は無かつた。

死の宣告をくらつた去年の春は、病院の屋上から夜桜を見下ろした。ライトアップされた桜並木、そこを行き交う賑やかな人波は、道路一本挟んですぐ目の前にあるのに、ひどく遠い場所の光景に見えて、思い切り泣いた。

「来年の桜は見られるかどうか怪しい」と言われながら、次の桜も見たいと望んだ。

次こそは、あの人波に交じつて花見に興じたいと、そう思つていたのに。

今年に限つて、桜前線はやたらと遅かつた。

そして、開花を待つ事無く、桜より先に散った命。

ベンチから立ち上がって、その必要も感覚ももう無いけれど、両の足で地面を踏みしめて歩いてみた。すれ違ふ人達は私に気づかず、肩はぶつかる事も無くすり抜けた。降り注ぐ桜吹雪も、私の手のひらを通り抜けていった。

桜並木を間近で見る。生前あんなに望んだ事が今はできるのに、桜は去年より遠くに見えて、悲しくなつて泣いた。

桜は咲く。去年も、今年も、来年も、きっと変わる事無く。

人は来る。その顔ぶれは変わつても、桜を見に訪れる人が絶える事は無い。

私達はこの満開の桜の下にいる、大勢の中の一人。その一人がどう思うかで桜を見ているかなど、ましてやその人間の生き死になんて、他の誰も知ったものではない。ひどくちっぽけな事なのだ。

東京の桜は、もうすぐ終わる。

『ブルーマロウの恋』

「ああ、疲れた！ 喋り過ぎて喉がカラツカラだよ」

営業で外回り、アフター5もお得意様に付き合合せて飲んだり食べたりの正博まさひろには、私の夜の受験勉強が一段落ついた頃に帰って来る。

ソファに身を沈めてネクタイ緩め、お疲れモード全開のにいの為に、お湯を沸かしてハーブティーを淹れるのが、いつものお出迎え。

ガラスのティーカップに注ぎ、輪切りレモンを添えて差し出すお茶の色は、青。
「おつ、ブルーマロウか。ありがたい」

最初は鮮やかな水色。次第次第に紫になってゆく、自然界でも珍しいハーブ。喉にも優しいし、青色は食欲を減退させる色だから、それまで十一時過ぎに帰宅してから「ラーメン！」と言い張っていたにいのぼっこりおなかは、ちよつとだけ引つ込んだ。ほんのちよつとだけ。

ブルーマロウを前にした正博には、しかしすぐ手をつけずに、じつとカップの中身を見つめる。青が紫にうつろってゆく様子を、頬をゆるませて見届けるのだ。

そして色が完全に変わった所で、レモンを浮かべる。ブルーマロウは今度は綺麗なピンク色に染まった。

そこまでを見届けた所で、にいはようやくカップを持ち上げて、ハーブティーを口に含み、存分に味わった後、カップを置いてしみじみと呟いてみせる。

「やっぱり、ひまりのお茶が一番おいしいな」

その言葉が、さざ波のように私の胸へ、喜びの感情を運んで来る。

幼くして両親を事故で亡くした私を引き取って育ててくれたのは、やはり奥さんに病で先立たれた、従兄の正博に이었다。

最初は、二十二歳も年上のおじさんに馴染めなくて、ぎくしゃくしていたけれど、一生懸命私を笑わせようと、寂しい思いをさせないようにと頑張ってくれる姿に、段々と打ち解けて、今では、にいが笑顔を向けてくれるのが、嬉しくて嬉しくて仕方無い。

まるでブルーマロウのように。他人よろしく冷めた青から、少し慣れた紫へと変わって行った心は今、ピンク色になってときめいている。

にいとって、中学三年生の私なんて、恋愛対象に入らない小娘のままかもしれない。でも、あと数年もすれば、お化粧して、可愛いおしゃれをして、にいもびつくりの素敵なレディに変身してみせるんだから。

だからそれまで、他の誰かを見つけないで待っててね、にい。

るりからくさ　ようらくゆり
『瑠璃唐草と瓔珞百合』

きらり、と。昨晚降つて木々を濡らした雨の雫が、太陽に照らされて銀色に輝きながら落ちてくる。萌黄色のチュニツクと赤い膝上丈スカートの上に革鎧をまとい、愛らしい顔に似つかわしくない武骨な長剣を腰に佩いた、小柄な少女は、濃紺の瞳を一瞬まばたかせると、さっと手をかざし、水滴が頭に当たる前に振り払った。

履き慣れたロングブーツでぬかるんだ道を踏み締め、鞆に収まったままの剣で、背の高い草を薙ぎながら歩を進める。どれだけ歩いただろうか。視界が開け、眼前に昼餉の煙を煙突から立ちのぼらせる集落が見えた。

目的地の村だ。高い位置でひとつに結わいた色素の薄い髪を手で梳いて、少女はひとつ、息をついたのだった。

集落の入口で見張りに当たっていた男に己の名を告げると、たちまち村長の屋敷へ通された。虎の毛皮が敷かれ、硝子製のテーブルとふかふかのソファが用意された部屋で待つ事数分。見事なつるつる頭にすらりとした長身を持ち、黒縁眼鏡をかけた壮年の男が、にこにこ顔で現れた。彼が村長だろう。

「お待ちしておりました、リユル・フェーン様」

その挨拶に対し、少女——リユルは軽く頭を下げると、荷物の中から鈍色の筒を取り出し、蓋を開けて、中の上質紙を取り出す。

バウンサー
「用心棒ギルドから、悪竜退治の依頼を受けて、参上しました」

紙には『カルド村に害をもたらす悪竜の退治を、用心棒リユル・フェーンに託す』の文言と、用心棒ギルドの担当者のサインが書かれ、ギルドの公印が押されている。この紹介状が、ここらイロム大陸で用心棒稼業をする時に信用となる書類だ。

リユルは三年前の十五の歳から、用心棒として大陸を巡り、ある時は村々の畑を荒らす大獣を狩り、ある時は街に跳梁する怪盗を捕らえ、またある時は、小国の姫を隣国への輿入れまで暗殺者の手から守り抜いて、送り届けたりもした。

若いながらも着実に実績を積む女用心棒の噂は、この村にまで届いていたのだろう。村長は満面の笑みを崩さずリユルに近づいて来ると、こちらの両手をがっしりとつかんで、勢い良く上下に振った。

「いやあ、噂の用心棒リユル様にこの仕事を引き受けていただけるとは、誠にありがたい！」
眼鏡のレンズの奥の、狐のような目を更に細めて、村長はほんぽんとまくしたてる。

「しかも話通りに美しい方だ。『戦場の瑠璃唐草』とは上手く評したものですな」

『大樹の枝えだ蔭つたは天つ光を求めろ』

「号外、号外！ 大ニュースだよ！」

シヤムス王国の辺境、ホートンの街の広場にて。

噴水前に陣取った新聞屋が、男にしては甲高い声を響かせ、一枚ものの号外を次々と宙にばら撒く。

「我らシヤムス王国のゾハル王子率いる第一軍団が、アルハバル帝都を攻略！」

興奮は彼を取り巻く人々にも、銅鑼を叩いて響き渡るように広がり、我も我もと号外に手を伸ばす。黒地に『シヤムス歴史的な大勝利!!』の白抜き文字がでかかと刻まれた新聞が舞う。

「ほら、そこな兄さんにも！」

新聞屋が明朗な声をあげ、一枚が人の波を免れてひらりと風に乗る。そうして、彼らの背後を影のように通り抜けようとしていた、深々とフードをかぶった旅人の眼前へと舞い降りた。

買い込んだ食料を抱えた腕の逞しさや、それなりにある背丈からして、確実に男とわかるその旅人は、ひつたくるように号外に手を伸ばし、ざつと目を走らせる。

五百年、エルメダ大陸を支配し続けたアルハバルの滅亡は、この地に新たな朝をもたらし、ゾハル王子の名は解放の英雄として歴史書に長く残るであらう。

そう朗々と謳う紙面を目の当たりにして、旅人は八重歯にしては鋭い歯をのぞかせて唇を歪め、ちつと舌打ちして号外をぐしゃぐしゃに丸めると、視界に入ったくずかごめがけて放り投げる。放物線を描いたごみは、くずかごの縁に当たったが、くるくる縁を一回転した後、すんと中へ落ちて行つた。

それには目もくれず、旅人は足早に大通りを後にする。シヤムスの連中の熱狂は、彼には苦さをもつて口の中に広がる、不快な味そのものでしかなかった。

大通りを逸れて裏道へ。壁にびっしり鶯が這う、古ぼけた宿に入つて、まっすぐに一つの部屋を指す。

二回、その後に間を空けて一回、扉を叩く。それが符丁だ。

しばしの間があつた後、小さく駆ける音が扉に近づいて、鍵が外れ、薄紫の前髪と赤い瞳が片方覗いた。

中に居る人はこちらの言いつけをしつかり守つて、自分以外の不審者を部屋に入れる事はしなかつたようだ。彼は安堵の息をついて、歯を見せ笑みかける。

「心配無く。俺だけです」

赤い瞳がまばたき、ひとりが通れる程に扉が開かれる。彼は部屋の中へと滑り込むようにして入り、後ろ手で扉を閉め、再び鍵をかけた。

「広場の方が騒がしかったわ」

彼が買つて来たパンや果物をテーブルの上に置いてみると、鈴を鳴らしたような可憐な声が背中に投げかけられる。

「戦いに、何か進展があつたのね」

「貴女が気にされる程の事ではありませんよ」

努めて明るい声で話題を押し流そうとしたが、

「嘘」

責めるような一声が、ぴしゃりと空気を叩いた。

「カルマは嘘をつくのが下手くそ。一段声を高くするから、わかるもの」

伊達に幼い頃からの付き合いではない。このひとは、こちらの微妙な感情の変化もすぐに読み取つて、全てを見通すのだ。

「帝都が、落ちたのね」

このひとに隠し立ては出来ない。長い諦めの吐息をついて、カルマと呼ばれた男は、深々とかぶつていたフードを引きずり下ろしながら相手を振り返つた。

男にしてはやや長めの銀髪がばさりと翻る。碧の瞳で、相手をじっと見つめる。その整った顔だけ見れば、不思議な色合いを持つ美男子として人の目には映るだろう。

だが、彼にも、そして赤い瞳で見つめ返す小柄な少女にも、シヤムスに溢れるただびとは決定的に異なる点があった。

本来人として耳があるべき位置には髪が流れている。耳は、頭部からひよこりと一対、狼のよきな毛に覆われたそれが生えている。そして人間には決して無い、髪色と同じふさふさの尻尾がゆらゆらと揺れている。

『獣人』

シヤムスの者達がアルハバル人を呼ぶ時に、嘲りを伴って使う呼称の通り、彼らは、獣のごとき耳と尻尾、そして八重歯には過ぎる牙を持っている。

「ファールウ姫様」

「大丈夫」

小刻みに震える少女の肩に気付き、いたわりを込めて呼びかけると、気丈な声が返って来る。

「泣かないって決めたから。帝都を落ち延びる時に、お父様達とはもうお会い出来ないって覚悟を決めたから。わたしは大丈夫」

ファールウと呼ばれた姫は、左の拳を右の掌で包み込むようにおさえて、きつと唇を引き結んだ。

『くりまんじやろと僕』

奴との出会いは、学校の帰り道。

奴は、

道端に落ちていた。

それはどこから見ても、立派なくりまんじゅう。

何故今時道にむき出しのくりまんじゅうが？

すっげー不自然。

とても、あやしい。

ていうか、でけーよ。

様々な考えが頭の中を巡った後、オレが取った行動は、

(とりあえず、避けて通ろう)

だった。

しかし、脇を通り抜けた途端、そのくりまんじゅうに、によきつと丸い手足のようなものが生えて。ぱちつと、半円形の目が開いて。

「うゆーっ！」

と、鳴きながら飛びついて来たのだ。

オレは衝撃のあまり、十秒ほど固まった後、とにかく叫びながら、走って逃げた。しかし奴は、うゆうゆ言い、ぴよんぴよこ跳ねながら後を追って来るではないか。

一キロメートルほど走って息が切れ、諦めて止まったところで、

「うゆ、うゆ〜」

奴はぴよい〜んとジャンプして、オレの肩に乗った。

「な…っ、何なんだよ、お前は！」

問いかけても、「うゆ、うゆうゆうゆー！」の繰り返し。

『『うゆ』じゃわかりません』

冷たく言い放ってやったら、奴はさつと、日本語の書かれたボードを差し出した。

ちなみに、達筆だった。

『とりかえばやのその先に』

ひとつの小国が、隣国に攻め込まれた。

隣国は外つ国から輸入された銃火器をもって、小国の騎馬兵団を次々と撃ち倒し、圧倒してゆく。

小国の王都まで敵が迫った時、国王の双子の王女と王子の内、弟王子は、残る精鋭兵を率いて隣国兵を迎え討ったが、凶弾に顔を撃ち抜かれてあっけなく落馬した。

最後の砦を失った王都は隣国兵に蹂躪され、王の首は謁見の間の床に落ち、その背後にいた姉は、隣国の王への土産として虜囚となった。

この世界では、よくある話である。

そう、よくある話だ。敗戦国の王族の生殺与奪は、勝利国の主の思いのまま。

その身をどうするかも。

身体が沈むほど柔らかいベッドに抑え込まれたミアーハは、琥珀色の瞳で、自分の上に覆いかぶさる征服者の顔を見つめた。

日に焼けた肌は褐色、高い位置で束ねた黄金の髪は獅子のように跳ね、獲物を狙う肉食獣のごとくぎらついた瞳の色は濃紫。男にしては細めの眉からすらりと流れる鼻梁の線は美しく、非常に均整の取れた顔をしている。

それが今、ミアーハを征服しようとしている隣国シャルラツハの王、ダイアンの容姿であった。「俺を前にして恐れを見せぬか」低いながらも艶を持った声が耳朶を震わせる。「あの弱小国の姫にしては、肝の据わった女だ」

恐れる必要など無い。どうせこの男に自分を征服する事は出来ない。

何故なら。

「しかし、命乞いひとつしなないと、可愛げが無いぞ。媚びでも罵倒でも、何か言ってみせたらどうだ」

それを聞いて、ミアーハはすつと目を細め、薄い唇で三日月の弧を作ると、シャルラツハに連れて来られてから初めて、口を開いた。

「妻となる価値も無い『王女』に、何の意味がありましたでしょうか」

それを聞いて、ダイアンの目が驚きに見開かれる。対してミアーハは、してやったりとばかりに笑みを深くする。

今、ミアーハの口から紡ぎ出されたのは、ダイアンよりは高いが、決して女性には持ち得ぬ、

男声。

「お前」

ディアンがしばしあつけに取られた後、慌ててミアーハの身体をまさぐる。たつぷりと生地を使った故国フェイオンのドレスに隠されて、ここまでの道程でシャルラツハ兵の誰も気づかなかつた真実を悟り、相手が絶句するのを、ミアーハは胸のすく思いで見すえていた。

『そなたらが逆に生まれていたら、良かったのにな』

父は事あるごとに、恨めしそうにそう洩らしていた。

アミッドと、双子の姉ミアーハは、赤ん坊の頃からまるで男女正反対のような性格をしていた。姉が乳母の乳を求めてぎゃんぎゃん泣きわめく間も、弟は呑気にすうすう寝息を立て、走り回るようになってからは、走って転んでは膝をすりむき、木登りから落ちてあざを作っては周囲をひやひやさせる姉に対し、弟は木陰で静かに本を広げて、一心に読みふけていた。姉弟に武術や馬術を教えるに至った時も、より熱心に師に食らいついていたのは、王女の方だった。

『姫様はあんなにお転婆なのに、殿下の大人しさといったら』

『いっそ性別をお取り替えしたら良かったのにな』

侍女達は陰に陽に噂して、兵士達の人気も、頼りない王子より勇ましい王女に集まった。

それを憂いた父王は、遂に決断した。ある日、姉弟を執務室に呼び出し、でっぷりした身体にそれだけは立派に整った口ひげをいじりながら、

『そなたら、入れ替われ』

と告げたのである。

『相応しい者が相応しい位置にいた方が、フェイオンの為だ』

その鶴の一声で、アミッドとミアーハは、名前ごと立場を入れ替わった。勇ましく剣を振るう

『王子』アミッドと、深窓の『王女』ミアーハの誕生であった。

父は愚かだ。ミアーハは常にそう思っていた。

フェイオンの一般市民はともかく、城に出入りする兵や貴族は、王子と王女が入れ替わった事を知っている。男装の麗人に娘はやれないし、女装の王子を娶りはしない。ならばとアミッドが他国から嫁を迎えても、ミアーハがどこかへ嫁いでも、まともに子は残せない。フェイオンの血筋は二人の代で途絶えてしまふ。

波打つ黒髪を長く伸ばし、豪華なドレスを着て、父と、軍服に身を包んだ姉の後ろで微笑みながら、自分の行き場所はどこにも無いのだと、ミアーハは己の仄暗い未来を想像していた。

だが、今。

「面白い」

ミアーハを組み伏せた体勢のまま、シャルラツハの王は、八重歯を見せて笑ってみせるのだ。

「フェイオンのミアーハ王女は大人しいが勤勉と聞いた。俺は子を残す事に興味は無い。お前は」
そうして、ミアーハの耳元に唇を寄せて、誘惑するように囁いた。

「偽りの妻で構わん。俺の隣にいて、俺を助けてみせろ」

ミアーハの心臓が、どくん、と大きく脈打つ。同性に至近距離に迫られて貞操の危機を感じたからではない。一人の人間として求められた。今までに無かった経験が、彼に昂揚感をもたらしていた。

当サンプルは、一部の物語序盤です。
この先は、本編でお楽しみください。

七月の樹懶 たつみ 暁
URL:<http://july.main.jp/>
Twitter:tatsumisn